巻頭言

山梨厚生病院　呼吸器心臓血管外科
橋 本 良 一

1988 年に山梨肺癌研究会が発足し、翌年 4 月に山梨肺癌研究会会誌第 1 巻が発行されました。以来、年 2 回の研究会とその内容を論文として掲載した会誌は休止することなく継続され、山梨の肺癌診療に大きく貢献してきたと思います。今回を含めた 32 冊の山梨肺癌研究会誌を開いてみて感じたことを少々述べて巻頭言とさせていただきます。

この研究会初期の大きなテーマとして肺癌検診があり、その普及と質の向上に本研究会は大きく貢献してきました。また長田先生のご努力で行われた研究会による山梨肺癌登録は 1991 年から 6 年間行われ大変な成果を上げられました。ただ、これを先駆けに公的機関による登録システムの作成を期待しましたが、今のところ発展していないのは残念です。さらに毎回欠かさず行われた特別講演は錚々たる先生方のお話を聞けたことが思い出されますが、初期には講演の要旨を会誌に載せていなかったのが心残りです。

さて肺癌の治療には様々な努力が行われていますが Stage 別の生存率の改善は殆ど得られていないのが現状で少々無力感に苛まれます。しかし副作用の少ない抗癌剤の開発、モルヒネ剤の進歩、新しい放射線治療法の開発、胸腔鏡手術の発達など、QOL の向上を目指した治療法の進歩には目覚しいものがあり、これらの発表も多く毎日の診療に多大な福音を齎しました。

一方、CT の進歩に伴って早期発見による治療成績の向上は明らかで、特に早期肺細気管支肺胞上皮癌は最近の話題となっています。やはり CT の進歩が最近の最大の発展と感じました。グローバルに見ればさらなる早期発見と予防のための禁煙の普及に努力することが最も有効なことなのでしょう。

今回の会誌を読まれたら以前のものも本棚から引き出して見ていただけることをお願い致します。ちなみに本棚にない方はホームページから全文が見られますのでアクセスしてみてください。